

特集

産む人を中心にした帝王切開

1991年。私は緊急帝王切開分娩（以下、帝王切開）で長女を出産しました。

当時、帝王切開は20人に1人と言われ、インターネットでの情報収集も難しく、また出産関連雑誌にも帝王切開の情報はほとんど見当たらず、母親学級でも聞いた覚えはありませんでした。

心の準備ができないまま手術室に入り、手術台に上がる前に全裸になる恥ずかしさと、術後の震えに「娘を置いて死んでしまうのではないか」という恐怖を体験しました。呼吸法も陣痛も体験できなかった自分に、当時は「女性として失格」と烙印を押していました。

その後、次女、三女も帝王切開で出産しました。2回目の帝王切開で夫が覚えてるのは、手術室に向かうストレッチャーの上で「ごめんね」と泣いている私の姿でした。まだ産み方にこだわっている自分がいました。そして3回目ですらようやく安心して帝王切開で出産し、前を向くことができたのです。

2000年から当事者として情報発信を始め、これまで帝王切開で出産した多くの女性と出会い、その声を聞いてきました。そしてモヤモヤした気持ちを抱えているのは私だけではないと知りました。

さて、私が出産してから30年以上経った今、帝王切開は、どのように変わってきたでしょう。

帝王切開と経膣分娩という、2通りしかない出産方法なのに、妊婦が出会う情報は経膣分娩のことがほとんどです。産婦人科・麻酔科・形成外科など関わる診療科も、各科からの情報提供も病院によって異なるため、傷や術後の体のケアについて知らないまま退院し、1人で悩み困っている女性の存在が、「無事に産まれた」とことで忘れ去られています。経膣分娩では当たり前のように考慮されるパースプランや立ち合い出産、早期母子接触など、出産体験の質を高める取り組みも、帝王切開では普及しているとは言えません。経膣分娩では「産む人が主役」という意識があるかもしれませんが、なぜ帝王切開では、同じように関わるできないのでしょうか。

2022年、レキップ・フェミニンさんとの出会いにより、帝王切開をキーワードに、関連する各診療科の専門家から学ぶオンライン講座を実現することができました。対象は助産師など医療者と産前産後のケアをされる専門職です。帝王切開で出産する女性を中心に据えた出産ケアのために、必須の知識が語られたこの講座を、もっと多くの方に知っていただきたいと思い、このたび特集にしてお届けします。

帝王切開で出産する女性の一番近くに、助産師というプロフェッショナルがいつもいてくださることを願っています。



細田 恭子

Web サイト「くもといっしょに」
<https://www.withkumo.org/>

